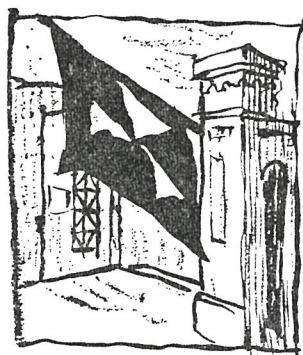




安部磯雄と同志社

— 生誕百年にあたりて —

坂 本 武 人

同志社の卒業生について語るとき安部磯雄は欠くことのできない人物の一人であるようである。

安部磯雄は慶応元年（一八六五）二月四日福岡に生れ、昭和二十四年二月四日満八十四才の誕生日に東京で歿した。

本年はちょうど彼の生誕百年に当る。彼が明治三十一年以降奉職した早稲田大学では、昨春秋その記念会を開催したと伝えられている。わが同志社においても彼を記念して何らかの行事が本年中に行なわれるように聞いている。

安部磯雄がその母校であり、二度に亘って教授生活を体験した同志社において、記念され、顕彰されるべき必然性は、早稲田のそれに劣らないものであると私は思う。

二

安部磯雄の同志社在学期間は周知のように明治十二年九月より明治十七年の九月までの満五カ年間であった。この間、彼は英学校本科を卒業し、神学科を中途退学している。また、彼が同志社で最初

教壇に立ったのは、明治十九年一月より翌二十年二月までであり、この間、万国地理・万国歴史・地文学・代数を教授した。

明治二十年四月二十三才の時、金森通倫の推薦で当時わが国における屈指の教会であった岡山教会の牧師として赴任し、明治三十八年八月まで牧会生活を送った。もっともこの間、明治二十四年七月から二十九年二月まで欧米に遊学している。

明治三十年八月再び同志社に中学教師として迎えられ、宗教主任及び教頭を兼務し、明治三十二年三月までその任にあった。

かくて、安部磯雄の生涯の思想を決定つけたものは、彼の前半生を記述した自叙伝「社会主義者となるまで」（昭和七年二月改造社刊）に述べられているように、同志社において学んだ若き日々に培われたものであり、その生涯の意義は、「ある種の人々は安部は英国のマクドナルドの真似をして政党を作り、総理大臣になる野心を持っていると評するが、苟くも同志社で新島先生の教育を受けた者が斯る小さい考えを持つものではない。私の眼中には内閣も大臣も無い、私が世を去って、新島先生にお会いする時、先生が安部さ

ん（君とは決して申されなかった）よくやってくれましたといつて下さるか何うか、私にとって新島先生からこの一言を賜わることが出来れば生涯の意義は完い」（昭和八年五月十九日チャペルにおいて大学予科及び神学部学生に述べた講話、同志社校友同窓会報七六号）と言っているように、同志社で新島先生から与えられた教えの忠実な実践にあったといえよう。

三

さて、安部磯雄のこのような思想は当時の同志社の如何なる社会的、教育的背景から生れたのであろうか。

極めて独断的な推論になると思うが、当時の同志社教育は、新島先生が従来日本で受けた教育（儒教的なもの）に西欧のキリスト教主義をとり入れ、それを止揚し新しい教育理念とし、もって日本における新時代の人間形成の大本とされたと見ることができよう。しかしてその新しい教育の場が同志社であったのである。

明治維新の思想的混乱期において、この初期の同志社の教育方針を受け入れたものに私は三つのタイプがあったように思う。第二次大戦後、世代的な相違を戦前派、戦中派、戦後派と呼ぶならわしがあったが、私はこれになぞらえてこの三つのタイプを維新前派・維新中派・維新後派と名付けたいと思う。

新島先生の新しい教育に理解を示したものは、まず維新前派の人々のうち、日本の西欧化の必要を痛感したものであり、森有礼や加藤弘之らの急進的啓蒙思想を受け入れようとする社会風潮に支えられた人々であった。これは山本覚馬をはじめ、創立期の同志社に教師ないし直接賛助者として参加した人々と見よう。第二に維新中

派とよばれる人々、これは同志社の最初の学生であり、熊本バウンドに代表される人々といえることができる。

彼らはしかし新島先生のごとく、日本的なものと西欧的なものを対決させ止揚させることを完全に可能ならしめることができず、二元的なものをその思想の中に混在せしめていたとみることができ。たとえばのちの反動期に蘇峰のとなつた態度の中にこのことを読みとることができよう。

かくて、新島先生の新しい教育を真に体得し得たものは維新後に成長して来た維新後派であつたといえよう。しかしもちろん維新後派全てがそうであつたというのではない。

四

同志社に在学する学生生徒が大体維新後に成長したものによつて占められるようになった明治十七年、同志社にとって一つの事件がもち上り、これを契機に維新後派の人々も同志社教育の本領を充分受け継ぎ得ないで、社会的反動の波の中にそれを埋没せしめたように思える。

この年は社会的には表面上いわゆる鹿鳴館時代ともいわれ、欧化思想の殷賑を窮めた年であつたが、反面、自由民権運動は転機に立たされ、進歩的なものは絶対主義天皇制を中心にして抬頭して来た反動的国粹主義的なものによつて次第にその社会的な力を失いつつあつた。

同志社にあつてこの反動の波に直面して最も大きな動揺を見せたのは、維新前派でも維新中派でもなく、維新後派であつた。

維新前派も維新中派もかつて反動的思想と規を一にする思想の中

に育てられて来たのであり、これを全く異質のものとして受けとめることはなかったのであったが、新しい思想の中に育った維新後派はこのような風潮を肌身に直ちに受け止めざるを得なかった。そして、ここから「同志社歴史中空前絶後の大事件」(青山霞村著「同志社裏面五十年史」昭和六年七月)といわれるいわゆるリバイバルが起った。これは普通の信仰状態から熱狂的なものに転化し、インスピレーションを受けたものが自らを救い主と感じ、その感想を聞くものもまた、話し手の靈気に感動するという状態であり「明治十七年三月の三週間の出来事で初旬に徴候が現われ、初旬の感激は中旬熱狂に進み、下旬、廿一日頃は真の狂気と相触れる程度に上って局を結んだ」のである。これにより同志社はもとより京阪神の諸教会もその影響を受けた。しかし、この激動の震源地であった同志社において、教師(維新前派・維新中派)は一人もこの聖靈を体験せず、これを感じたものは全て学生であり、しかも下級生(二年生)が中心であった。ここに、このリバイバルの特徴があったといえる。しかし、これは同志社で受けた新しい教育が社会的反動化の波によってゆるがされようとするに対して、学生生徒がそれに對抗する術を知らぬままに、無意識のうちに自然発生的に若いエネルギーをキリスト教の信仰をかりて発散させているうちに生じた特異現象とみることができよう。これによってついに一人の犠牲者すら出すに至ったのである。

余談になるが、最近の学内外における学生生徒、一般にティーンエイジャーの無軌道ともみられるべき行動には、戦後の民主化ないし民主的教育に対する反動的風潮への意識的、無意識的抵抗の姿が

ひそんでいないであらうか。これを批判する戦前派ないし戦中派は今一度このことを反省してみる必要があるとはいいたろうか。

安部磯雄はその前々年明治十五年二月五日に受洗をし、クリスチャンとしてまた最上級生として学内にあったが、この渦中に入っておらず、多くの学友が反動化の風潮の中の外的な宗教的ストームにエネルギーを費しているうちに同志社教育の真髄を蓄積していったと私は思う。

五

さて、新島先生の教育の根本理念は何であり、それを安部磯雄はどのように受け継いだであらうか。

私は新島先生の教育理念を「自由教育・自治教会」のスローガンに示されるように、あらゆる権威からの解放を期するものであったと考える。それは神の名の下に宗教的外被をよそった権威に対しても激しく戦うものであった。新島先生の「私の膝はローマ法皇の前で曲げるには余りに固すぎる」という言葉はこれを端的に示している。すなわち、新島先生は人間があらゆる権威から自由を得、神によって創られたままに一人一人の個性が尊重され、個人の尊厳が認められ発揚されることを教育目的としていたと思う。

新島先生のこのような教育理念は学校当局の権威(校則)に学生がしばられるべきでないとする「自責の鞭」の中に、また教会ないし教員が中央集権的教団によって規制されることに反対して敢然として立った一致・組合教会の合同反対の中に、更には官途につかず官立化せず、自由な社会人として自由な空気の中で同志社を設立せんとした旨意の中に、その他八重子夫人に対する・学生に対する・

五平さんに対する様々な逸話の中に、如実に示されているとみることでできよう。

神の愛の普遍化＝人格の尊重と個人の自覚こそ、新島先生が同志社学生に身をもって示されようとしたものであった。

六

私は安部磯雄こそ、この新島先生教育をもっとも良く体得した者の一人であつたと思う。牧界にあつて安部磯雄は新島先生が激しい世間の非難の中で一致教会と組合教会の合同に反対した時、よくその意を体し、代議員としてついにこの合同を不可能ならしめるために尽した一人であり、また伝統的權威にとられず岡山教会にあつては教会員に孤児として、特殊部落民として世から見すてられている人々の人格の尊ばれるべきことを身をもって教え導き、石井十次の孤児院事業に対する使命を強化せしめ、日野の河村五十鈴医博士の部落医療事業へのきつかけとなさしめた。

社会経済学者としての安部磯雄は貧富の別れるところを土地及び独占事業の私有にあるとし、これを公有化することは是非を説いた。また、社会問題の解決に意を注ぎ、社会問題を社会的貧困としてとらえ、その解決策としてつぎのことを提示した。

- (一) 物質的扶助としての慈善事業
 - (二) 精神的救済としての教育
 - (三) 自助的事業としての労働組合・共済組合・消費組合
 - (四) 国家的事業としての社会保障
 - (五) 根本的改革としての社会主義
- 社会主義者・政治家としての安部磯雄は人々の福祉向上を目指

し、民主社会の実現を計ることを意願し、その主旨に従い明治三十四年社会民主党を結成し、その主旨を天下に宣言したが、その内容が危険思想を含むものであると政府により即日解散せしめられた。しかし、この宣言に示された主旨はことごとく戦後われわれがそれを最上のものとして受止めている民主主義の理念に合致するものであり、伝統的權威を否定し個人の尊厳思想に根ざすものであった。

家庭人としての安部磯雄は新島先生の教えを忠実に守り、苦しい生活の中からある時は牧師としての給料の一部を割き、ある時は留学中の皿洗いのアルバイト収入の中から、将来自分と共に家庭を築くことになっている婚約者に学費を送り、神戸女学院を卒業させ立派な社会人としての教養をつまめた後、結婚した。そして「家庭は個人の幸福を基礎」とし、「その根本は平等の思想」であり「決して両親のために、殊に夫のために家庭が作られ」てはならないとした。(家庭の新意義「廓清」第四卷八号)

最後に、社会人としての安部磯雄は国が国民の安寧福祉を目的とせず人々の平和をもたらせるものでなければ、そのような国は存在しない方がよいとさえ極言している。これらは新島先生の自由な民主的なしるも毅然とした教育を身につけてこそはじめて可能となるものであったと信じる。

同志社に連なる私たちは創立九十周年を、また偉大な先輩の生誕百年を迎え、単に記念としてこれを心にとめるだけでなく、その根本精神を新たに汲みとり、代々受け継がれて来たものを受け継ぎ発揚させていくことが必要であらう。(同志社女子大講師・経済学)

環境と人



機 事 機 心

東海運新幹線が走り出して便利になった。機械の自動運転とかで海外の専門家がかぶとを抜いだ程の誇るべき日本の技術ではある。時間の半減によって倍の仕事が可能となった人も少なくないであろう。しかし、車にゆられながら何かせかせかとして心の落着きがなくなり、冷たいドライな気持ちに蔽われるのは私一人であらうか。電話もすぐに通じる。またたく間に用が片付くだけに考える暇もなく、姿は見えずで大切な用件が、これですんだのかと後で気になる

大 倉 三 郎

ことさえある。時間と空間の観念は変わってきた。しかし時間に対して生活の密度を有効に向上せしめた人がいくらあるであらうか、と思うと何か世の中のテンポが人間を離れて機械的に突走ってゆくような気がする。

半世紀近い昔、同志社に学んだ頃には、東京は夢のかなたの遠い都であつたのが、今はニューヨークやパリに行く方がよほど身近い現実となった。いわんや月世界の旅行さえ夢ではない現代の科学文明ではある。

何も原子力だ宇宙開発だと眼をみはる必要はない。われらの身边

を見渡せば充分である。今この原稿を書いているテーブルはメラミン樹脂の貼付けだし、身につけているシャツも着物も化学繊維になる。コヒはインスタントで手早くいられるし、一服つけようと手にとるライターは合成製品の外皮にLPGの油が入っている。合成樹脂の軽快さはあらゆる道具や器物を初めとして、かしわ餅の皮にまで進出してきた。一步町に出れば四角い高層ビルが肩をいからせて並ぶ。人間は蟻のように忙しく出たり入ったり、ガラスの自動扉は暖かい握手を不用にし、エスカレーターは黙って人間荷物を運んでくれる。便利で軽快この上ない。しかし、人間の心まで便利で安易にしてしまわないであろうか。

室に入れば建築化された蛍光灯が、スイッチ一つで陰のない白い空間を現出するし、光源のない面照明も、既に実用化に入りつつある。照明の能率化は有難いが、光の役目はそれだけであろうか。例えばクリスマスイブには薄赤いキャンドルの光りでなければ間に合わない。あのほのかな陰の光りに包まれなければ聖歌の夜はすませないのである。

一面たしかにわれらの生活の新幹線は科学技術というすばらしい燃料をいっぱいに焚き込んで、能率と軽快の全速力でばく進しつつある。好むと好まざるとに拘らず、われらはその機械的環境の中にゆられてゆく。しかし、ゆられているものは生の人間であり、その機械を作った手であり頭であることを確認しておきたい。

かつて北回りでコペンハーゲンに飛んだ時、物凄い速度でこの科学のるつばは、極地の上を突進していると頭では知っていたいながら、その空間と時間の転倒する中で、鋭い雰囲気緊張感に一時身をこ

わばらせた。しかしやがて手元を顧みると、見慣れた手さげも目の前にあるし、隣席も人間らしいいびきをかいている。とりわけ美しいステュアデスのこくのあるサービスに、やはりここにも毛深い環境があつたのだと心暖まる思いをしたことであつた。科学がいかに人間を追いたてようと、技術の魔物がいかにわれらの環境に挑戦しよう、やはり生身の心臓はゆるやかに暖かい波を打つのである。

人間は環境の動物であるといわれる。といって、合理と技術一本槍の、またそれを誇示するような冷たい環境が、人間の心まで、行動まで機械的、便利的に冷やしてしまわないことを願いたい。環境とはもともとと生物学の用語であつたかと思う。生物が生を托する場の外境を指しているが、単なる外の客観としてあるのでなく、その生活に密着し、それに意味を与え存在あらしめる外界なのである。

特に人間の場合は複雑で、自然環境と共に生活の万端を含む施設環境があり、これに社会的文化的環境もからみ合つて働らく。殊に外的環境が内なる行動環境を通じて人間心理に及ぼす力は大きい、尚さら教育の場ではそうである。人間は動物のようにた易く環境に順応してしまうことにはないにしても、新しい事態に当面して、初めは驚異の眼をみはるが、やがてそれをせせら笑いながら、しかしいつの間にか慣れつつになつて忘れてしまい、これに没入してしまうのではなからうか。科学技術をば作り上げ、これを駆使していると知っていながら、つい機械的環境に染めあげられて、科学を忘れ人間を忘れてしまわねば幸いである。

莊子の稿に面白い句がある。「機械あるものは必ず機事あり、機事あるものは必ず機心あり、機心胸中に存すれば純白備らず」と。

孔子の門人子貢が旅行中、ある男が甕をもって井戸水を汲み上げ汗を流しつつ如に注いでいるのを見た。子貢がはねつるべを使えば十倍も仕事がかどるのに、と教えるとその男の曰く、機械を使えば機事に襲われ、機心が湧く。一度それが起れば、心は純白を汚されて人の道を外してしまう、と逆に子貢をたしなめたという話。肌で心で如に水をやる心意気は有難いが、元々機械も人間が作ったものである。機事という環境にあつて、機心に奪われず、むしろ機心を越えて人間の純心で機事を蔽ひ包むこそ現代の課題ではなからうか。科学化、技術化を呪うのではない、むしろこれを感じし利用しつつ、機心に執せず、いや執せずということも忘れ去つて、胸中自ら常に純白たる姿勢、それが当たり前の環境でありたいのである。環境もまた人間の心から生ずるものであるから。機事の殺到に応接いとまのない現代の外境にあつて、そのような人間の姿勢を保つ新しい環境づくりが、結局は現代の人づくりにもつながるのではなからうか。

歌う建築

古来いくたの先覚によって受けつがれてきた同志社精神の法灯は今なお連綿と輝き続けていることを私は疑わないし、その栄光の下、誇りと安らぎを感じることを、今更しかつめらしく述べる要もない。ところで、その聖火が敬愛する一部の先達の方に高く掲げられつつ、光の及ばない陰に、いやむしろ、その囲りに白々しい蛍光灯が輝いているとしたら、法灯のかもし出す雰囲気は半減してしまふ。聖歌の夜はやはり白色光を消してキャンドルの光りを遍く輝か

せてほしいのである。少なくとも白色光には環境に調和した装いを看せかけるべきである。それは形式だけに止まるものではない。あたりの施設環境が、それにふさわしくなければ、遂に魂入れずになつてしまふからである。ことさら教育の場において形を整えることが、遍くここに学び起居するものに、巧まず自然に心の法灯づくりを身につけしめるであらう。環境は正に無言の垂訓なのである。

由來同志社の自然や施設の環境はその法灯にふさわしいものがあった。彰栄館の鐘の音に明るい希望の朝を迎え、チャペルのステンドグラスに心はずむ歌声を聞いて授業が初まる。赤煉瓦の一つ一つもが何やら語りかける思いで、薄暗い夕の祈禱会に自分を結びしめる。それは法灯の照す自からなる精進の庭であり、単なるロマンスの夢結ぶ偶然の場ではなかつたと思われる。

今に残るあの古い赤煉瓦の建物は建築様式としては正統のものではないが、ネオ・ゴシックを加味した素朴さの中に、キリスト者の心なじます独特の言葉語るものであつた。といつて、あの苦むした建築造形を現代の伸びゆく同志社にとり入れたというのではもちろんない。現代の機能的建築が昔日の比でないことは言うまでもなく、新しい今後の建設に科学技術の粋を採用すべきことは当然であり、それに伴つて近代建築的外貌がその表現の骨子となることも当然である。高層の大建築も新しい衣裳をつけて学園の空を蔽ふことになるであらう。

しかし唯そこに望みをかけたことは、同志社ならではの特色ある、そしてわが法灯にふさわしい建築表現がかもし出されること、それが学園の施設環境であつてほしいことなのである。機械的近代

技術を駆使しながらも、機事に奪われることなく、機心を越えて、基督教的人間教育の一本筋の通った造形表現をば、そこはかとなく現前せしめたいと願うのである。そのことは一面、あの保護文化財として価値高い赤煉瓦の建築にも環境的調和をかもすであろう。

学園の建築には市街地に肩をいからず幾何学的なドライの怪物は似合わしくないし、といって殊更これ見よがしの表現過剰は鼻につく。そこに機械の設計とは違った建築デザインの苦味がある。機械でも人間工学とさえいわれる意匠デザインを加味して、人間の肌や感覚になじまず造形に苦心する。それは機械と人間のための苦肉の策といってもよいであろう。建築はそのあり方から本具的に根性を築き上げねばならない。元より建築も、その構造や設備は機械的操作によるわけだし、機能の取扱いにも半面は物理的な要素が座を占めているが、その心理的な面は一段と人間的工夫が大切となる。更に造形の上で、調和や対比、色彩等の構成を初め、部分の意匠的工夫などがデザインの主眼をなしている。そこに初めて施設の環境要素が醸成される。それが一応の建築である。

しかし、本物の建築にはまだこれだけでは止めたくないものがある。殊に同志社の法灯を守る建築には、更にプラスしてほしいものつまりその建築に魂を打込んでほしいのである。それは同志社的人間ロマンをしみじみににじみ出す最後の味付けであり、今なお生きた校祖の志操と夢を語る建築なのである。かくてこそ同志社にふさわしい教養の場が生かされるのではなからうか。それは単なる建築に付属の彫刻や意匠の事柄ではない、それをも含めて建築的造形そのものの基本的構想の問題である。

ゲーテは「建築芸術」という小論の中で、次のような趣旨を書いている。建築は三つの目的、すなわち最も手近かな目的とそれ以上の目的、更に最高の目的を達すべきである。最も手近かな目的とは今日の言葉でいえば実用的な機能を指している。次のそれ以上の目的とは、機能と並んで、感性的調和的な造形創作である。それは素材と目的により、また感覚の性質によって条件づけられ、その枠内で調和的であることを要する。この外になお最高の目的がある。それは感覚をこの上なく満足せしめ、教養ある精神を驚かせ、恍惚たらしめるものである、と説いている。

普通の建築は第二の目的まででよいのである。その上さらに第三の目的を追求するところに、建築をこえ造形をこえた生きた建築がある。ボル・ヴァレリは「ユウパリノス」の中でソクラテスに言わしている。「あるものは黙し、あるものは語り、また最後にあるものは歌う……それはあまりにも言葉に絶するが……魂を鳴りひびかせ多産的にする」と。そこに「歌う建築」があるそれは夜となく昼となく、無言の歌声にわれらを誘う第三の形象であり、多産的に拡がり満つる環境でもある。それこそが自主的教養の場にふさわしい、ことさらわが学園にあらまほしい法灯の香りをただよわすものではなからうか。

クロバの一枚一枚の葉から、煉瓦の一つ一つの目地から、地にのび拡がり無限に天を指す、あの絶体の根性をば身近かに造形せしめそのしじまの中にかすかな歌声をききたいものと思う。

（校友・京都工芸繊維大学長）

同志社発展の要因

松 山 武 司



百年の大計

今年同志社創立九十周年の記念すべき年である。一昨年の本誌七号の巻頭にあるように、新島先生は「ことわざにも、一年のはかりごとと穀を植えるにあり、十年のはかりごとと木を植えるにあり、百年のはかりごとと人を植えるにありとあるが、おもうにわが大学の設立のごときは、実に一国百年の大計画であって、やむにやまれないところの事業なのである」と述べられている。この大志は先生の愛国精神の発露に外ならない。先生の愛国精神は先生のアメリカ留学中にお父上の新島民治大人に書送られた手紙に度々表明されている。一八六七年十二月二十五日の手紙の末尾には(傍点筆者)「私事も怠り無く学問研究いたし、成業の上國家の爲に寸力を尽さんと存し奉り候間、何卒大人に於てもたのもしく思召し下さるべく候。扱て古語に申す通り、名を立て道を行ひ、父母の名を後世に遺

すは孝の終りなりと。何卒大人私をして此孝を立てしめば、私も幸甚に候」

とあり、また一八七一年九月六日の手紙には、

「小生儀も御存じの通り、身の辛苦をも顧みず、離れ難き父母に別れ、辞し難き本邦を去り、断然万里の波濤を航せしは、全く國家の御爲に寸力を尽さんとの志願なり。その念日夜忘れ難く、斯くの如くも外国に留学仕候故、兼て申上候通り、小生の如きは國家に此身を差出し候間、何卒大人には小子は最早戰場に出でしものと思召し、此の如く國を愛する男子を御持成され候は、御身のお手柄と御楽しみ下さるべく候。」

とあって、先生がいかに愛国精神に立脚して勉学されていたかを推知することができるのである。先生の大志が実に崇高な熱情に基づくものであったかを痛感するのである。先生の勉学は自分自身の私益のためでなく、國家の公益のための勉学であった。今日國家のた

めに勉学する学生が何人あるであらうか。国家のために、寸力を、尽すという意気込みの勉学であつたから、本当に真剣な勉学を成し得たものであると敬服の念をもたざるを得ないのである。われわれ先生の衣鉢をつぐ者としてこのような強い信念をもっているかを考える

と、いささか忸怩の感を抱かないではいられない。

先生が明治八年六月八日父上に送られた手紙によれば

「昨日蒸汽船（デブス宣教師同伴）にて淀川を溯り上京致し、京師に於て学校建築の儀相諮り候処、豈料らんや何の差遣でもなく、京師中指折りの人物（註 山本覚馬氏）相談に及び呉れ、勿々六千坪程の土地を買受くべき談判に相成り、当秋より学校造営に相懸るべき企に御座候。」云々とあつて、ここに始めて先生の大志の実現への第一歩が踏み出されたのである。先生がこの時いかにお喜びになつたかは想像にあまりあるものである。ここに同志社百年の大計が築かれたのである。

四十余年前の同志社

その後九十年の星霜を経て今日の大同志社学園の発展を見たことは、先生の衣鉢をつぐ者として慶賀に耐えないところである。本誌十号に、九大の具島兼三郎教授が「伸びゆく同志社」と題して、教授が三十年前同志社大学に在職されていた当時を回顧して、現在の同志社大学に言及しておられるが、実際三十年前と比較して見ると現在の同志社は実に見違えるばかりの発展をして来たのである。具島教授は三十年前と比較して「伸びゆく同志社」を書いておられるが、私は同教授よりも十四、五年前の同志社大学（主として法学部

に關して）の状況を想い起すのである。昨年のリユニオンの日に私たち大正十三年に大学を卒業した者が十五人集まつて卒業四十周年の記念パーティーを持った。その時の話題の中心は矢張り在学当時の想い出と現在の発展についてであつた。予科入学時代からすれば四十五年になるので、ちょうど同志社創立以後の大半を經過している。入学当時は現在の今出川校舎のある今出川通り（烏丸から河原町まで）にも、今出川から北の烏丸通りにも電車は通じていなかった。その後一、二年して今出川線が寺町まで延びた当時には、電車の通る音響が予科教室（現在本部のある有終館の階下）での講義に影響して授業困難にしたこともしばしばであつた。また現在明德館のある敷地にあつたブラック教室は、今日の同志社学園のどこに行つても見られないような寒々とした貧弱極まるものであつた。大学の法学部経済学科に進んでからは、致遠館の二階（ここが法学部の教室にあてられていた。階下には教授控室と法学部長室と教務事務室があつた）で授業を受けた。これも百五十人程度はいる大教室と六十人ばかりはいる中教室と、二十人ばかりはいる小教室二つとの四教室に過ぎなかつた極めて狭隘なものであつた。

教室は右のようにお粗末なものであつたが、それでも現在の学生よりも研究心が旺盛であつた自負することができると思う。それというのが、学生数も経済学科だけで各学年に百二、三十人の学生しかなく、しかも新進気鋭の諸先生が講義されていたからである。当時の教授陣には法学部の法律学科、政治学科の専任教授としては、中島重、今中次鷹、高木庄太郎、塩見清、能勢克男の諸教授があつたが、法律関係のほとんどは京大の教授方の出講に頼んでいたのだ

あって、佐々木惣一、菅原春二、竹田省、恒藤恭、末川博、田村徳治、渡辺宗太郎、跡部、末広の諸先生が講師として来られていた。また裁判所関係から中治武二先生も来られていた。

経済学科の専任教授としては、中川精吉、古屋美貞、黒川芳蔵、和田武、波多野鼎、林要、石田秀一郎の諸先生があつたが、その他京大から財部静治、恒藤恭、山本美起乃の三先生と櫛田民蔵、久留間鯨造、米谷彦次郎、山口の諸先生が講師として来られていたと思う。今と違って当時は経済学科の専門科目が少なかったので、私は経済学科の専門科目の全部を採つた上に、法律学科のほとんどの科目を聞いた。今から思うと随分沢山の講義を選択受講したものである。現在でも印象に残っているのは中島重(憲法)、竹田省(商法)両先生の名講義である。立命の末川総長は当時京大の助教授で、いつも羽織袴で民法を講義されていたし、恒藤先生も京大の助教授で、経済哲学を講義されていた。低声な早口で深遠な講義をされたのでノートが取りにくかつたことを覚えている。櫛田、久留間両講師には経済学史を聞き、林要先生にはジードとリストの経済思想史の英書講義を聞いた。私どもは河上肇博士の名講義を聞く機会に恵まれなかつたが、当時胎頭してきた社会科学の研究にも相当研究心を引きつけられたものである。当時の総長(学長事務兼任)海老名弾正先生は社会科学にも関心をもつていられたかつて、中島重先生を筆頭に東大の新人会に属する諸先生を引ばつて来られた功績を忘れることはできない。われわれ学生もよく海老名総長宅に入りましたものである。大学を卒業して助手に採用されて始めて海老名総長宅に挨拶に行つた時、先生が「しつかりやないかい」と激励されて、沢山

の英書を紹介されたことを覚えている。あの時からすでに四十年を経過した。昔から光陰矢の如しというが、月日の経過は実に早いものである。四十年の間には同志社にとって危機も度々あつたが、戦後その苦難が実を結んで今日の発展を見るに至つた。すなわち昨年度の同志社事業報告によれば、創立当時六千坪に過ぎなかつた同志社の所有土地(大学以外の中高の校舎その他を含めて)十五万六千坪に増大し、所有建物も一八、四八九坪(延坪四五、七六三)と拡張し、教員数も大学、高校、中学、幼稚園を含めて九九四名に上りこれに職員数五〇二名を加算すると学園全体で、一、四九四名の多数に上つている。この多数の同志社教職員に対する人件費が年間十億六八七万円の額に上つている。この学校側の教育施設に対して二万四千近い学生、生徒、園児を見るに至り、大学生だけでも一万五千名以上に上つている。学生数においては同志社大学以上の私学も数校あるが、しかし現在同志社大学が日本の一流の私学として認められていることは誰しも否定しないところである。新島先生も御自分が創立された同志社大学がこのような大発展を見るに至つたことを大いに喜ばれていられることであらうと思うのである。

今後の同志社

戦後急速に発展した同志社が今後いかなる経過を辿るであらうかは、ただに同志社人だけでなく、一般世人の関心事であらうと思う。特にわれわれ同志社人にとって切実な問題である。秦理事長は本誌十号に「私学の苦悩」を訴えられている。この訴えにはわれわれの考えなければならぬ多くの問題点を暗示している。今日同志

社は他の私学と同様に授業料中心の経営に立っている。授業料中心の経営に立つとすれば勢い学生数が問題になる。学生数を多くしようとすれば、マスコミの弊が生じるし、学生数を少くすれば経営がなり立たなくなる虞がある。授業料中心では、経費をまかなうだけの学費値上げをしようとすれば、父兄の負担が大になるから、勢い有産階級の子弟だけが入学することになる。従って学費値上げにも限界があることはいうまでもない。そこで昨年申頃から急激に展開されてきた「教育条件整備のための国庫助成運動」が意義をもつのである。昨年七月、愛知文相は「私学に対してもっと強力な財政的な助成をしなければならぬ」と言って、私学に対する国庫補助を増額するの意向を示し、かつまた私学への寄付金に対する租税減免措置を私学対策として考えているようであるが、昨年末に発表された四十年度の予算政府案によって見ると、私学補助に関係ある項目として挙げられる教育振興助成費は二八、七〇九百万円で、三六三百万円の増額に過ぎない。この増額は中学、高校、大学全体に対するものとするとすれば、私立大学にどれだけ割当てられるものか知ることが不明であるが、恐らく全私立大学のそれぞれの大学に割当てられる額は甚だ少額で心細いものであると推算せざるを得ない。それゆえ「教育条件整備のための国庫助成増額」のより活発なより効果的な運動がなされなければならないことはいうまでもない。また愛知文相の意図する私学への寄付金に対する租税減免措置が早急に法制化されることが緊急対策である。減免というよりも、百尺竿頭一步を進めた抜本的対策として、租税免除の措置があつて然るべきである。国庫助成増額の運動をなすと同時に、この抜本的対策の

実現に努力すべきである。この対策が実現した暁には、個人にしても会社にしても、多額の所得税を払わなければならない徴税に対しその一部を私学の寄付金に廻すことも可能となるであろうし、また多額の相続税を払わなければならない者は、私学への寄付を積極的に為すに至るであろう。同志社創立九十周年記念事業資金の寄付申込口数は、昨年八月末現在で八、二五九件で、その申込額はやつと募金額の過半の五億円を少々上回る額に過ぎない。もし上に述べるように寄付金に対する租税免除が実現していたとすれば今日は募金額を十分達成したであろうと思う。私学寄付金に対する税免除があつて寄付が多額にあることになれば、私学助成のための国庫補助もより巨額の増額を緩和する一助にもなるし、また私学の経営も楽になることであろう。百年の大計は人を植えるにありとせられるが、その人を植えるには良い教育施設がなければならない。すなわち物的・人的の条件が備わらなければならない。両者のうち人を育成するについては人的条件がより根本的な条件である。人的条件は同志社教職員・の待遇如何に関係する。バイブルには「人はパンのみで生きるものにあらざ」と訓えているが、生きるためには生活資料がなければならない。教育に従事する者にとっては研究資料がなければならない。要するに教職員にとっては、現在および将来の生活安定への保障が必要である。このように考えてくると、今後の同志社の発展要因としては有能な教職員を落ちつかせるに足るだけの待遇改善と退職後の生活安定への考慮が十分に払われることであると思う次第である。

(経済学部教授・保険経済学)

生徒と共に



谷川孝造

教師として、常に自からにただし、苦悩する問題は、どのような人間を育てるかというべきかという事である。

教育基本法に基礎づけられた「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希求する人間の育成を期する」「教育は人格の完成をめざし、平和的な国家および社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身共に健康な国民の育成」という理念や教育目的は、公立学校と私立学校を問わず、一般的基礎的なものである事は言うまでもない。ただ特色ある教育理念をかかげる私立学校、私たちの同志社中学校ではいかにあるべきかという事である。

徳育の基本をキリスト教主義におく本校では、より全人的な人間形成の教育をめざすのが当然であるし、宗教々育を行なう同志社であるがゆえに、基礎的な教育目的を達成するにも恵まれた教育の場であると思うのである。

少年期より青年期へ移する段階にある中学生は、非常に

不安定な時期である。感情や行動の面においては極めて振幅が大きく、日々起伏が激しい。いわゆる難かしい年令である。自主的に歩もうとしながら脚力の足りぬ事に焦り、貪欲に吸収しようとしながら自らのふところに入り切らぬものを拒否する。

苦悩しながら歩む彼らが欲求し、また必要とするものは同行者である。ある時は一步を先んじ、ある時は肩を組む同行者である。ここにおいて教師の役割が重要となる。それは教室での教科学習以外の場においてより必要である。特別教育活動や学校行事が重視されるのは、この理由によるのである。学校教育において、教科学習を充実させるべきは言うまでもないが、教育目的達成のためには特別教育活動の場において、教師と生徒との触れ合いが特に同志社では重視されるべきであらう。

中学校では、運動会や創立記念祭、ホームルームといった一般的な行事の他に、多くの特別教育活動を行なってい

る。三十余年の歴史をもつ丹後由良の海浜キャンプや高原キャンプ、更には冬のスキー教室や耐寒遠足等々である。それらのうち、最近行なったスキー教室の模様を記してみたい。

十二月二十四日より四泊五日、志賀高原でスキー教室がひらかれた。ローマ人への手紙第十五章の始めの聖句を主題とし、スキーを通じての教育の場をもったのである。

師走とも思えぬ暖かい陽ざしを受けて、善光寺平のリンゴ畑を走るバスは、若さではちきれんばかりである。白く粧った白樺林も、例年より少い量の雪さえ都会育ちの彼らには珍らしく嬉しいようである。

額に汗する激しい練習の合間には、白雪をいただく北アルプスを遠望し、あるいは急斜面を戯れころがる者、先生に雪玉をぶつける者等、あり余るエネルギーの全てを発散させようとする様子は美しくさえある。それにしても少年少女たちの発育の良さには、今更のごとく驚かされるのであった。

彼らの瞳には、学校では見られない輝きさえある。扱いにくい年令とされ、何事にも反抗的だと言われる彼らではあるが、素直であり明朗そのものである。虚飾なき自然のふところにいだかれて、一切の仮面——イムペイシエンスやフラストレイションなどをかなぐり捨ててのせいではなからうか。特に刺戟が強く、喧噪と粉飾の充滿する環境に生きる彼ら都会っ児は、自然の叫びに耳をかたむけ、そ

の鼓動に反応する鋭い感受性と、それらを肌でつかみとりたいという欲求を強くもっているのであらう。

大自然から受ける感動は、ただ風味の佳さを賞するのみでなく、神の前にぬかづく信仰に通ずるものがあると思われる。そうした場に、教師と生徒の枠を超越した人間的な交わりが極めて深く、よりスムーズにもてるのである。

雪山が静かに、闇につつまれる頃、待ちかねた夕食となる。快適な疲労感と満腹感の食後は、彼らの最もやすらぐ時である。その食後、一女生徒から皆に訴えがあった。出発真近くなって、病気で参加を中止した生徒へ、この喜びを分かちあい、慰めようというのである。小遣いがさかれ、絵葉書や人形となつて不参加者の心を暖めた事は言うまでもない。技術の向上はもちろん、こうした彼らの人間的な暖かさや、その自主的な実践力もスキー教室の大きな収穫であったと嬉しく思つた事である。

多くの教科外活動の機会は、お互いが神のもとに連なる兄弟姉妹である事を学び、心身を鍛え、教師と生徒が共に語りあえるすばらしい場である。教師にとって、昼夜生徒と行動を共にする事はなかなかの苦勞ではあるが、神と人に愛される良き人の育たんために、同志社であるがゆえに更に力を尽さねばならないと思うのである。

願わくばより多くの青少年が、恵まれた自然の環境の中に過せる施設や時期の与えられる事を。